

當の婦人は申します。テエブル掛や乗合馬車は引込ませて置いた方がようござんす。私はせりあげた人に軀を賣るのではありません。

フルンチユリイ

その御返辭は受けません。私は逃亡兵として、乞食として、渴<sup>かつ</sup>えた人間としてあなたにすがつたのです。あなたは私を助けて下さつた。手を出してキツスをさせて、あなたの床に寝かして、部屋の中に私を置いて。

ライナ「横から」

私はそれをスキツツルの皇帝にしたのではありません。

フルンチユリイ

そこなんですよ、私のいふのは。「手早くライナの手を取り、まごもに顔を見ながら勝算を期して」さ、おいひなさい、誰の爲めにあれ丈の事をしたのです。

ライナ「極りわるげにはほえんで小さくなくて」

チヨコレエト兵隊の爲めにですわ。

フルンチユリイ「男の兒のやうな喜びをもつて」

結構。有り難う。「時計を見て急に几帳面になつて」時間が來ましたよ、少佐。あなたはあの聯隊の始末を上手にせられたから、今度はきつとテイモク師團の歩兵隊の解決を頼まれますよ。さうしたらロム・バランカから歸しておやりなさい。サラノフ君。僕が歸つて來る迄結婚したまふな。僕は來來週の木曜日の夕方の五時には正確に歸つて來るから。御婦人方。さようなら。「軍隊式の敬禮をして出ていく」

サアチヤス

何といふ男だ。



## 解説——愛國心の由來

### 一、ブルガリヤの興國より露土戦争に至る沿革

ブルガリヤ最古の住民は、アアルヤ族のトラキヤ人である。幾多の小族に分れて居つたが、その中で牛耳を執つてゐた小族のモエジャ族の名をとつて、羅馬帝政時代に、羅馬の屬國として、「羅馬のドナウ地方なるモエジャ國」と稱してゐた。その後ゴート人やフン人(匈奴)の侵略があつて、この地方にはスラウ人が侵入して來て、スロベノイと稱するに至らしめた。カイザル・ヘラクリオス(六二〇——六四二)の時代には、このスラウ人がバルカン半島に瀰漫してゐたものであつた。しかるに六七九年に、フィンランド人であるブルガリヤ人といふのがドナウ地方に現前して來て、先住のスラウ人と戦ひ、ビザンツ人と戦ひ、遂にその族長ボリスといふものが、スラウ人を征服して八六四年には隸屬を率ゐて東方キリスト教の洗禮を受け、自らはコンスタンチノポリスのパトリアル



クに端入つた。そして被征服民族であるキリスト教化せられてゐたスラウ人の風俗習慣を採用して、混成の國民を造り、その國の名は征服者のブルガリヤの名をとつてブルガリヤと稱した。これがブルガリヤの建國である。

ボリスの子のシメオン（八八八——九二七）といふのが怪腕家であつたので、當時ロマ帝國に服従してゐたコンスタンチノポリスの町を脅かして、バルカン半島の大分部を征服し、自らは「ブルガリヤおよびギリシアのカイザル」と稱してゐた。この時の領地はドナウ・ブルガリヤを始めとし、トラキヤ、マケドニヤ、テッサリヤ、エピルス、アルバニヤ、ドナウ河の北方一帯であつて、セルビヤもビザンツも貢を納めてゐたものである。シメオン帝のときには文化が大に開けて、文學、宗教、土木に顯著なる記録を残した。

その後幾多の帝が帝位を繼承してブルガリヤ帝國の擴張を圖つたのであるが、その間セルビヤ、ビザンツなどと交戦して或は彼等を支配し、或は支配せられいろいろの國運の消長のあつたのち、イワン・シスマン三世のとき、遂に帝政

がもちきれなくなつて、一三六六年トルコ王ムラアド一世に征服せられ、首府トルノウオはトルコ人の支配するところとなつた。ブルガリヤはここに全く獨立を失ひ、亡國となつたのである。

かやうにしてトルコ統治の下にあることが、十八世紀の末までに及んだ。ブルガリヤ人の間には、トルコの苛政の下に苦みながら、シメオン帝の黄金時代を追想し、臥薪嘗膽で興國の精神を暗に養成しつつあつたのであるが、その精神の發動たる新ブルガリヤ運動の先驅者といふ可きものは、バイシオス及びその弟子のソフロニイといふ宗教家であつた。バイシオスはブルガリヤ年代記を著して、ブルガリヤ人獨立の正當なることの覺悟を新たにせしめた。また當時はトルコ文明の餘波をうけて、ブルガリヤ國もだんだんに開明の度を増し、一八三五年には初めてブルガリヤ國民小學校といふものが出來、一八七二年には國內に八十箇所の學校が建つた。一八四四年には雑誌が刊行せられた。反トルコ精神はこれらの機關によつて養成せられて、一八七五年にはボスニヤで起つた



一揆につれて、ブルガリヤ國內に於ても、暴動が起つた。その年の五月にはブルガリヤ人が一萬二千人トルコ人に虐殺せられた。この慘劇は全歐洲の神經を刺戟した。就中イギリスに於て激烈であつた。列強は一八七六年コンスタンチノポリスで會議を開いて、ブルガリヤの二都、トルノウオとソフィヤとの自治制を認め、キリスト教徒の知事を置く事に立案した。しかるにトルコ政府はそれを拒絶した。ロシヤはブルガリヤに加擔してトルコと戦端を開いた。即ち露土戦争である。

## 二、セルビヤの興國及び、露土戦争に至るまでの沿革

ロマ人の統治の下にあつて、モエジヤと稱してゐたことはブルガリヤとおなじである。六三八年にストラウの一族であるセルビヤ人が移住して來て、その名をそのままのセルビヤ國を建てた。ボスニヤおよびモンテネグロもセルビヤの領分内であつたのである。八世紀には東方キリスト教會に加はつた。その後ビザンツの國に隸屬した事もあつた、獨立してゐたこともあつた。八七〇年以後に

はブルガリヤの勢が大になつて、十世紀のときにはブルガリヤの支配を受けてゐた。ブルガリヤが衰へた時分にはまたビザンツの勢力の下に立つた。一〇四三年にステファン・ドロストラウといふものがたつて、セルビヤを全く獨立のものとし、その子ミハエルのときは自ら王と稱したが、ビザンツと戦争し、また内亂などがあつて國內疲弊して、一一六五年にステファン・ネマンヤ一世といふものが東セルビヤからおこつて全セルビヤの藩主となるに至つた。その子のヅウシヤン(一一三三—五五)といふものが、ブルガリヤのシメオンに比す可き英主で、領地はマケドニヤ、アルバニヤ、テツサリヤ、エビルス、ブルガリヤに及んだ。一三四六年カイザルを宣して憲法 *Nakomik* を制定した。しかし子孫が暗君であつたのでネマンヤ家も一三六七年に絶えてしまつた。このネマンヤ王家と不和であつたウカシンがセルビヤの統治者となつたが、一三七一年にトルコと戦つて敗死した。その後の統治者は隣國と語らつて毎にトルコと干戈を交えたが、遂に一四五九年モハメッド二世のとき全くトルコのために息



の根を定められてしまった。それで以後はトルコの一地方となつたのであるが絶えずオオストリヤの援助をかりてトルコに反抗を試みてゐた。一八〇四年にオオストリヤが後援を拒絶したので、一八〇六年ツエルニイ・ゲオルヒといふ勇將が獨力でトルコ兵を撃退して自由を宣言し、ベルグラアドに都を定めた。オオストリヤの力を借りられなくなつてからは、ロシアに秋波を送つてゐたのである。一八一二年ブカレストで和睦をしてトルコの苛政を遁れ得たが、本當に獨立を成就したのは、ゲオルヒの後繼者のミロシユ・オブレノキクである。彼は世襲の統治權を得て、彼の兒が之を繼承したが、病没したので、トルコ政府はゲオルヒの兒のアレキサンデル・カウゲオルギエキクを藩主にした。しかるに一八五八年に開會せられたセルビヤ議會 Skupschina はアレキサンデルがトルコ政府の撰出者なるの故を以て、老年のミロシユを立たしめて、アレキサンテルに代はらしめた。そして列國の反對に拘らず徴兵制を布いて、盛に反トルコの準備をした。一八六七年にはオオストリヤの忠告によりトルコはセルビ

ヤ國から最後の撤兵をした。一八六九年にはミロシユの孫ミラン・オブレノキク四世が藩主となつた。そのうちヘルツエゴウイナでトルコ兵が虐殺を行つたのがもとで、暴動が起つた。セルビヤはモンテネグロと共にヘルツエゴウイナを助けた。ロシアは更に金と義勇兵を送つてセルビヤを助けた。そして一八七七年の露土戦争の一因をなしたのである。

### 三、露土戦争——サンステファアの和睦、ベルリン會議

露土戦争の源因は、トルコが所領のキリスト教徒に暴虐であつたのに對し、イギリス及びロシアが干渉して、キリスト教徒の安全を確保せしめやうとした。それが不結果に畢つたので、かねてバルカン半島に野心のあつたロシアがトルコに戰を宣したのである。ロシアではその軍に皇帝アレキサンデル二世が自ら出馬してゐたのである。戦争は一八七七年六月二十七日に始まつたのであるがロシアはルマニヤと結んでガラツツの道を通つてドナウを越えていつた。さうしてその年の十二月の十日にはプレウナを占領したのでトルコのバシヤは降服



の意を示し、ルマニヤ人は歸國し、アレキサンデル帝も露都へ歸つた。今度はセルビヤがトルコ政府に對して戰を宣した。トルコはイギリスの干渉を求めてコンスタンチノポリスまで引き上げてゐたロシアと和議を結んだ。それが一八七八年のサンステファノの和睦である。それによると、モンテネグロ、セルビヤ、ルマニヤは獨立を認められ、ブルガリヤはオストルメリヤを併せて版土を擴むること、しかしトルコに朝貢すること、ロシア官憲がブルガリヤに二年間駐屯すること、その外ロシアに好都合な條件であつたので、イギリスが之を喜ばず、オオストリヤもロシアがバルカン半島に覇を爲すのを恐れて之に抗議を申立てた。そこでドイツが之に干渉してビスマルク公が議長となつて、ベルリン會議といふものが行はれた。一八七八年の六月十三日から一ヶ月つづいた。その結果は、一、モンテネグロ、セルビヤ、ルマニヤは獨立すること。二、ドナウ河とバルカン連山との間の地域に、ソフィヤ及びその近郊を加へて、ブルガリヤ侯國を作ること。三、ブルガリヤの南部はオストルメリヤ地方としてト

ルコ王の所領とし、キリスト教徒の總督を置くこと。四、ロシアはオストルメリヤ及びブルガリヤを九箇月以内に、ルマニヤを壹箇年以内に撤兵すること。五、トルコ政府はボスニヤ及びヘルツェゴキナの軍備權をオオストリヤに托すること。六、トルコはエピルス及びテッサリヤの一部をギリシヤに割讓すること。七、ロシアはアジアに於てはバアツム、カルス、アダカンの地方を得ること。八、トルコ及びトルコの手梏を脱したる諸國に於て信教の自由あること等であつた。

#### 四、ベルリン會議後のブルガリヤ

ベルリン會議は、バルカン半島にある小國民をトルコの手から全く開放した彼等はこれから獨立國として國勢を張らなければならぬ。しかしこの獨立を得たのも自分等の愛國心にもよるけれども、ブルガリヤの獨立はロシアの賜物である。セルビヤの獨立はオオストリヤのお蔭である。ともに恩顧をうけた強國の干渉は免れない。かやうにしてブルガリヤはトルコの手から脱してロシアの



願使をうけねばならぬに立到つた。ロシアではブルガリヤの執政官としてドン・ドゥコフ・コルサコフを送つて一八七九年第一回の國民議會を首府トルノウオに召集せしめた。その議會は露土戦争に出征したアレキサンデル二世の甥に當る人で、バツテンベルクのアレキサンデル公といふ人を侯主として撰擧した。トルコ政府も之を承認した。しかるにロシアは執政官を撤回することなく、侯主を差措い干渉を爲し、官吏の要職はロシア人が之を占めてサン・ステファノの條約のやうな有様なので、ブルガリヤ人はロシア人を惡みだした。ブルガリヤ中には親露派と排露派とが出来た。アレキサンデル公は孰れに加擔していいかわからない。始めはロシアを恐れて排露派の議會を解散したりしたけれども排露派の自由黨が自分を立てて、大に黨勢を張つて來たので、斷然ロシアに背いてブルガリヤ國民の自由のために盡瘁する事に決心して、一八八三年ロシア人の大臣等に商議せずして憲法を復興し、ロシア人の大臣等を辭職せしめた。ブルガリヤ國民は大喝采を以てアレキサンデル公を迎へた。

### 五、ブルガリヤのオストルメリヤ合併

ブルガリヤの南部にオストルメリヤといふ國がある。ブルガリヤと同人種の國民で、かねてブルガリヤに併合せられん事を希望してゐた。ロシアもおなじスラウ人であるによつて、トルコを牽制する上にオストルメリヤをブルガリヤに併合せしめて、そしてブルガリヤの執政權を握りたいと思つてゐたので、サン・ステファノの和睦のときその條件を提出した。それに反對したのはイギリスである。それでは古い同盟國のトルコのために危険であるし、且バルカン半島にロシアの勢を扶植せしむるばかりだと思つたからである。それでベルリン會議の結果はオストルメリヤはトルコの所領になつてゐる。ロシアは他日之をブルガリヤに併合しやうといふ下心でオストルメリヤに壯丁を訓練する機關を備へて置いた。ロシアの計畫は圖にあたつて、オストルメリヤはトルコを放れてブルガリヤに併合せんとするに至つた。けれどもその時のブルガリヤは、ロシアが兩國併合を劃策した當時のブルガリヤではない、アレキサンデル公を戴い



て、ロシヤに反抗せんとするブルガリヤである。ロシヤ皇帝アレキサンデル三世は之を承認しないで、アレキサンデル公に侯主の辭任を迫つて來た。アレキサンデル公は一八八五年九月、オストルメリヤを合併してしまつた。之によつて狼狽したのはオストルメリヤの領主であるトルコ政府である。早速列國に通牒してその干涉を求めた。しかるに最初兩國合併に反對を唱へたイギリスは、ブルガリヤが前日と異つて排露的傾向ある事を認めて、ブルガリヤの強大はロシヤの南下を妨害するのに有効なりとしてトルコをしてオストルメリヤを斷念せしめた。トルコもロシヤと自國との間に排露主義のブルガリヤのあることを得として、引下つた。

xii

#### 六、セルビヤのブルガリヤに對する敵意

ブルガリヤのオストルメリヤ併合はセルビヤ人の神經を刺戟した。セルビヤ人はバルカンに覇を唱へんとしてゐる勇敢なる國民である。しかるに國王ミランオブレノウキクが自己の位を確保するためにオオストリヤと結んで、多大の保

護をうける代に、多大の干涉を受ける事になつてゐる。オオストリヤは、ベルリン會議で、ボスニヤ、ヘルツェゴウイナの兵權を握つてゐる故に、之に加へてセルビヤの後援者となつて、バルカン半島に勢をのばさうといふのである。セルビヤのブルガリヤ及びロシヤに對する反感を利用し煽動して戦を起さしめたのは、即ちその野心から出たものである。一八八五年十一月十四日ミラン王はブルガリヤに對して戦を宣して、急にブルガリヤの地内に侵入して小邑を占領した。宣戦の理由は、ベルリン會議の違反、半島の權力平衡の妨害、ブルガリヤ義勇兵のセルビヤ國境侵入といふのであつた。

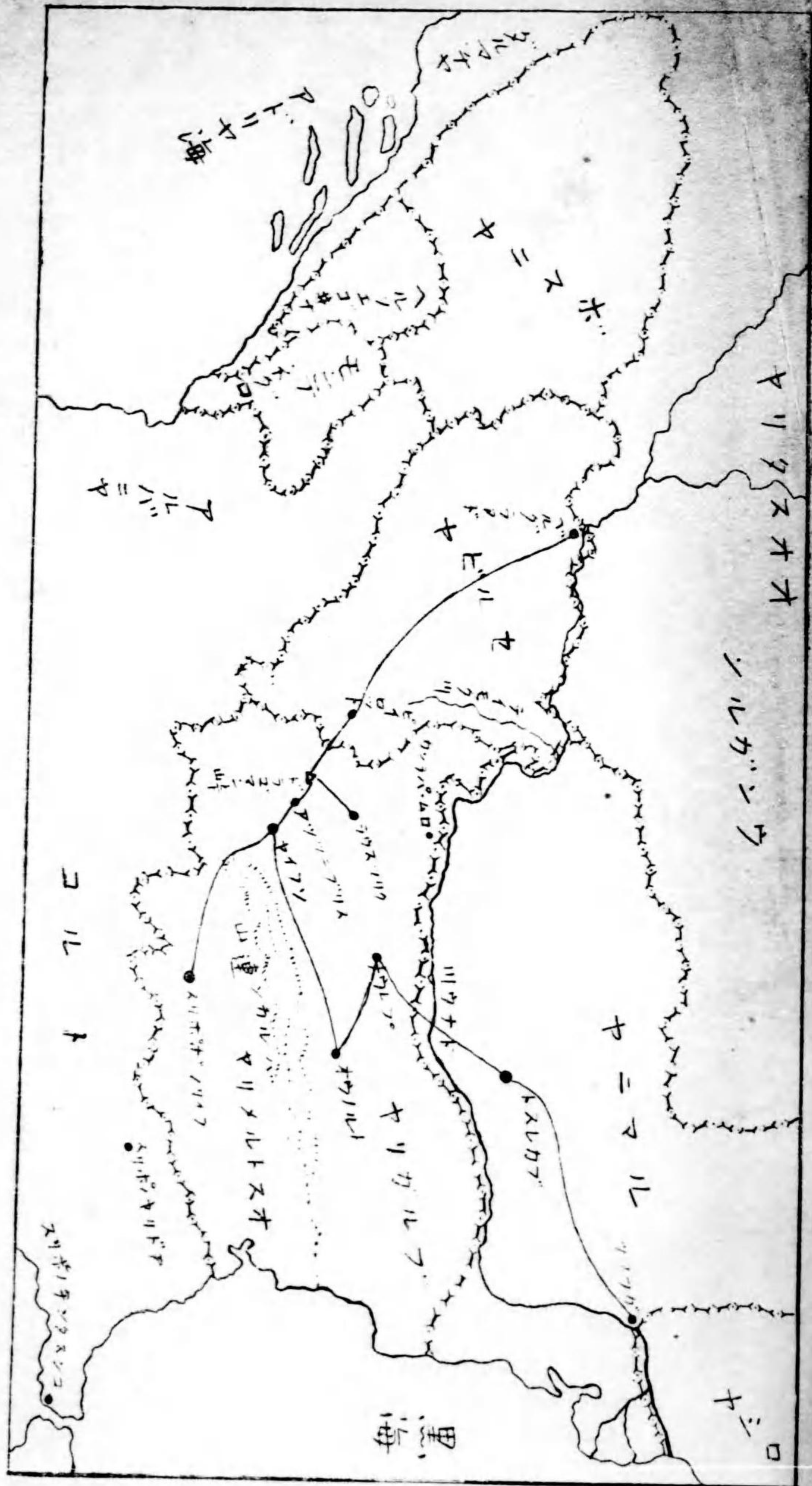
xiii

#### 七、戦争およびその結果

ブルガリヤとセルビヤとは共に小國ではあるが、バルカン半島はヨオロッパの外交に重大な關係のある處である。それで列國は慎重の態度をとつてゐる間に兩國はさつさと戦争を始めてしまつた。ブルガリヤ人はこの戦争では、無鐵砲な努力をして、三十時間に三十里の進軍をしたりした。一八八五年十一月十九



日には、セルビヤ軍がスリブニツツアで敗走して、ブルガリヤ軍は之を追跡して、セルビヤを横断して首府ベルグラアドに薄らんとした。ブルガリヤがセルビヤも併合するやうな事があつてはバルカン半島の勢力の權衡は益益破られるそこでオオストリヤが干渉して一八八六年三月三日ブカレストで和約せしめたその結果は兩國とも得るところもなく失ふところもなく、もとの默阿彌といふのであつた。アレキサンデル公の名聲は揚つた。オオストリヤの干渉で泣寢入をしたブルカリヤ人の愛國心は益益勃興して來た。





不許複製

大正二年十月十五日印刷  
大正二年十月十八日發行

定價四拾錢

譯者兼發行者 伊庭孝

印刷者 佐藤保太郎

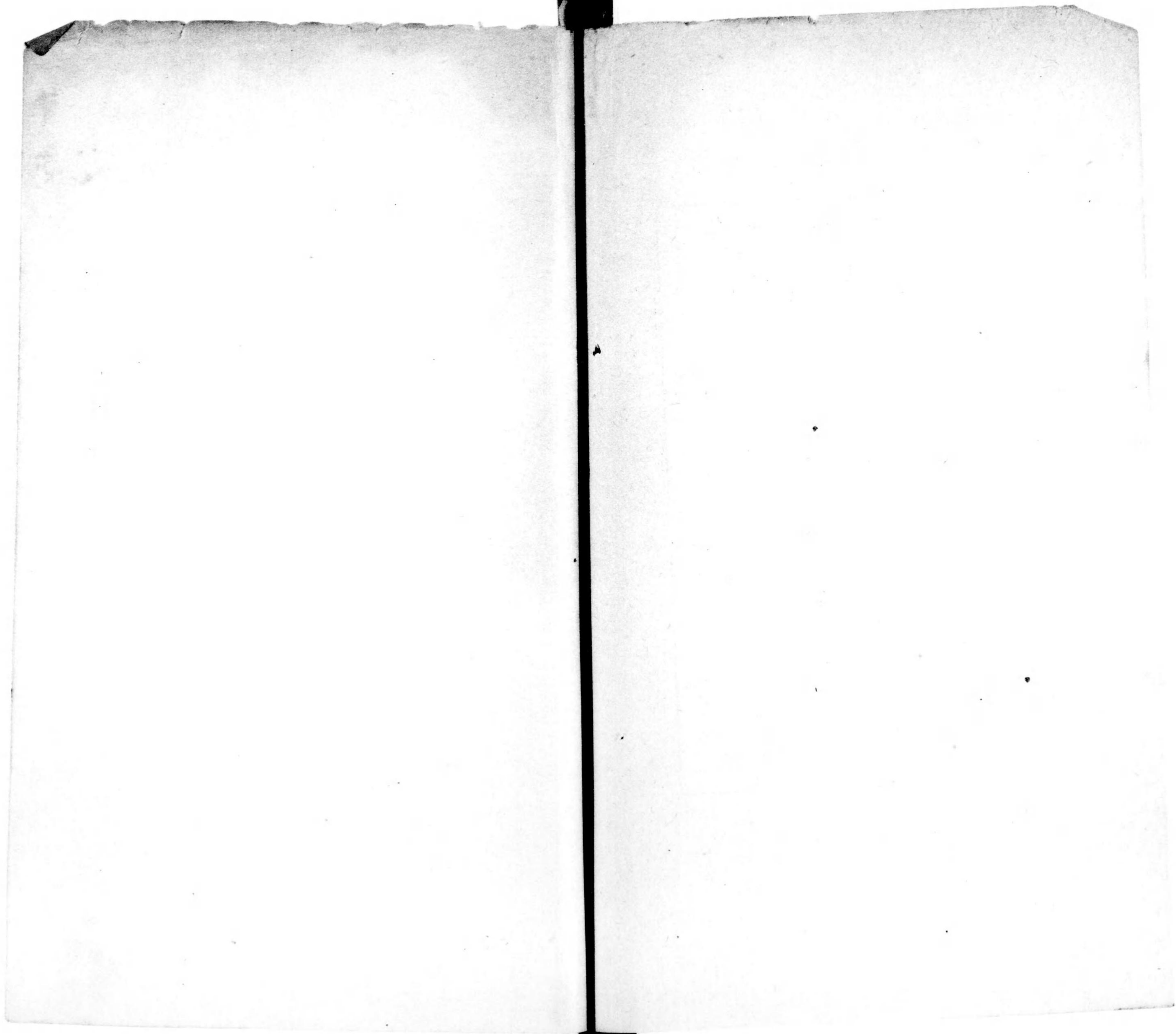
印刷所 東京市京橋區新榮町一丁目廿一番地 文祥堂印刷所

發行所 東京市芝區兼房町十一番地 新劇社事務所

發賣所 東京市京橋區尾張町二丁目十五番地 警醒社書店

振替東京五五三(電話新橋一五八七)



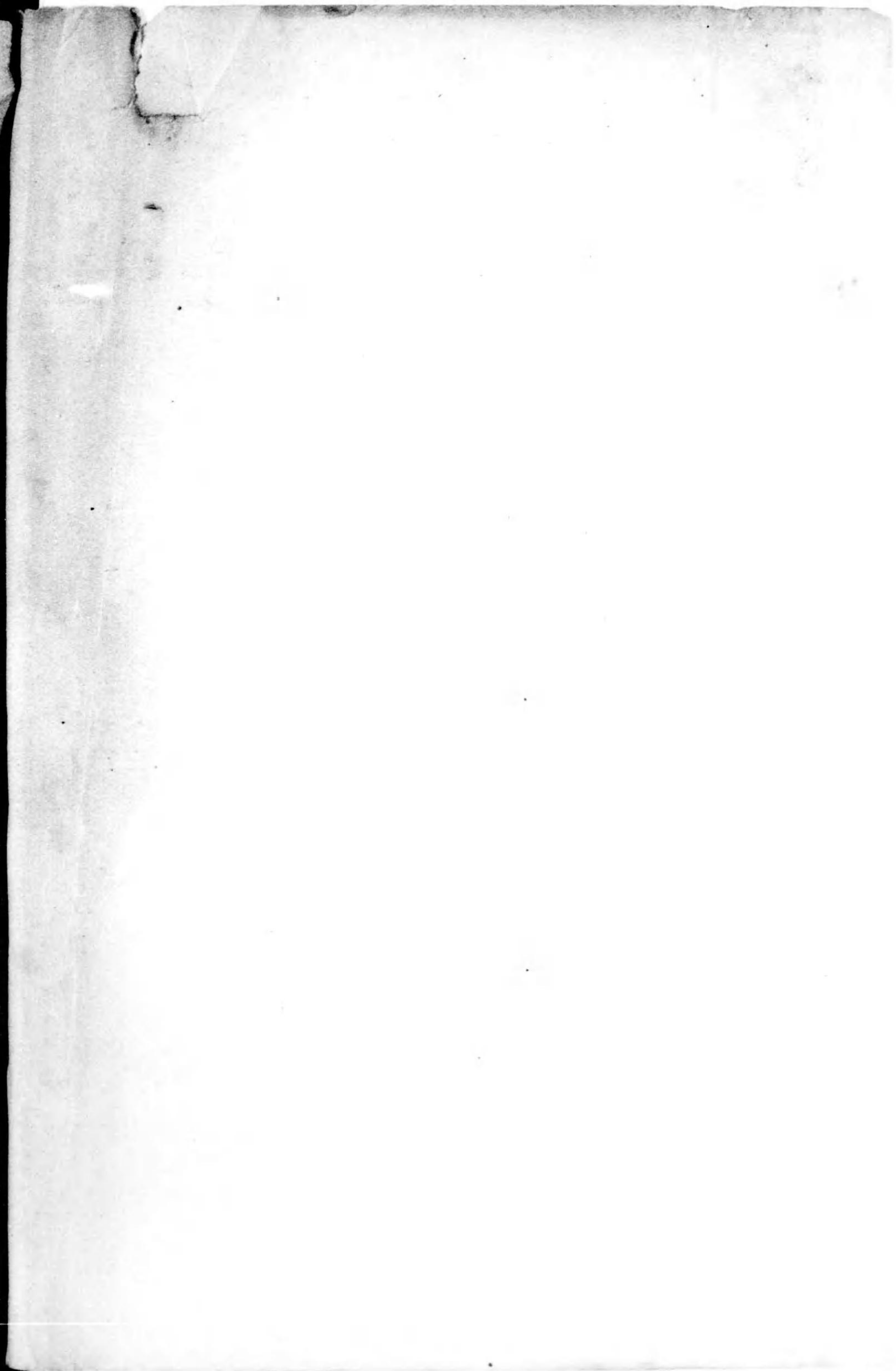
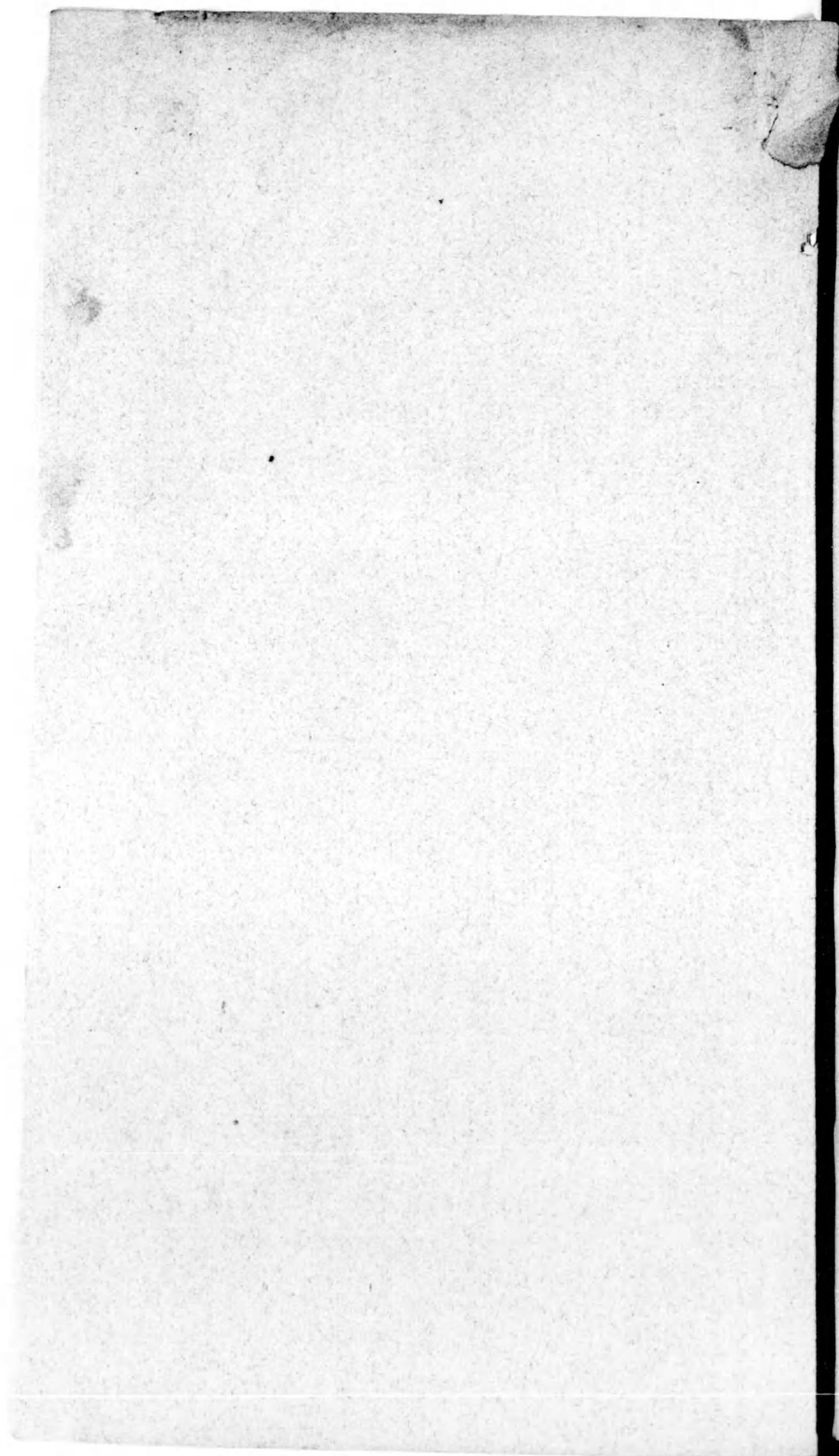




272

219







終

